

得意分野を活かして『職人の世界』で活躍中 ～「世界で1組」のリングをつくる～

—株式会社 もくめがねや 空目金屋—

職 場
ル ポ



(文 清原れい子 (写真) 小山博孝)



取材先データ

もくめがねや
株式会社 空目金屋

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-4-2 シャロンビル
TEL 03-3408-7863 FAX 03-3408-7864

Keyword : 就労移行支援事業所、精神障がい、業務体制の工夫・改善、勤務時間の配慮

POINT

- ① 作業工程の分業化と可視化を進め、障がいがあっても制作可能な体制を整え、雇用を実現
- ② 勤務時間は本人や支援機関と相談のうえで調整
- ③ 「障がい者雇用促進室」を設置し、面談や日報で体調管理を行うなどのケアを実施

WORKSHOP REPORT



八木管理部部長

伝統技術を現代に活かす

木目金^{もくめがね}。初めて聞く名だった。木目金は、金属の色の違いを利用して木目状の文様を創り出す、日本独自の特殊な金属加工技術のこと。江戸時代初期に生まれ、幕末には刀装具^{とうそうぐ}をはじめ、煙管^{きせる}、矢立^{やたて}、茶道具などが制作されたが、明治時代に廃刀令が出されると、その技術はすたれてしまった。

「株式会社木目金屋^{もくめがねや}」は、木目金の伝統技術を現代に活かそうと、東京藝術大学で彫金を学んだ現・社長の高橋正樹さんが1997（平成9）年に創業し、2003年に会社組織に。同時にNPO法人「日本杳目金研究所」を設立し、伝統技術の研究と復元、収集、保存、普及にも力を入れている（木目金の歴史、技術な

どの詳細はホームページをご覧ください。
<https://www.mokumeganeya.com/>。

高橋さんは、「人と人の絆を結ぶジュエリー（つながるカタチ）」として、木目金の技術を再現した婚約指輪や結婚指輪を世に送り出した。なぜ指輪だったのか、管理部部長の八木さんにお聞きした。

「木目金の特性を現代に活かすことを考えたとき、『お客さまの幸せとつながりを表現できる結婚指輪が適しているのではないか』と考えたからです。デザインは『紅ひとすじ』から始まり、『恋風』、『桜一輪』など、お客さまのご要望にお応えすることを大切にして、どんどん増えています」

マーケティング部アシスタントマネージャーの和久田さんが、さらに説明してくれる。

「木目金の特徴は、手づくりですので、



木目金リング



唯一無二の模様ができます。その、世界にひとつだけの模様の板を分かちあってつくられる結婚指輪により、お2人だけの絆を感じることができます。そういったことから、『ご両親に感謝の気持ちをプレゼントしたい』『みんなの絆ということとで家族で一緒につくりたい』というお客さまのご希望もあり、結婚指輪と同じ板からつくる、お父さまのタイクリップ、お母さまのペンダントなどの商品を設定しております」

20の直営店と31の取扱店を全国で展開し、販売員は全員正社員。江戸時代当時の簞笥^{たんす}や蔵戸^{くらど}など、伝統工芸品を什器^{じゅうき}として使う店舗は、杳目金屋の情報発信拠点だと八木さんは話す。

「店舗は、木目金の価値を広めていくことを第一に成長していければ、と考えております。木目金の歴史を理解して、伝統文化の価値を提供していくこと、すべ

マーケティング部アシスタントマネージャーの和久田さん

柰目金屋の制作アトリエ



材料となる金属板の研磨



てオーダーメイドで、お客さまのご要望をお聞きして一緒につくっていくことは、販売員が正社員として、しっかり取り組まなければ、むずかしいと思っておりません。また、全国にいるお客さまの指輪の「生涯メンテナンス」を行っていくためにも、店舗を広げました」

会社設立以来、結婚情報誌などで宣伝

してきた。一般にはまだ広く知られていないが、着実にファンを増やし、14期連続増収。直近5期での新規顧客は2万組を超える。

商品は本社近くのアトリエでつくり、制作と販売の一貫体制をとる。ホームページの「アトリエ紹介」には、「柰目金屋のアトリエで職人達は、伝統技術・木目金を通して、『ものづくり』の魅力・やりがいをお客様のメッセージ』から感じとりながら、障がい者の仲間と共にリング制作をおこなっております。おふたりの『世界に1組だけ』のリングは、障がい者の自立と社会参加を支援しています」とある。

社員数は160人で、大多数が正社員。店舗の9割は女性、制作部門も半数以上を女性が占める。障がい者は、制作工程で7人（発達障がい4人、精神障がい3人）が正社員として働き、障害者雇用率は4・4%。素材づくりから始める、世界に1組の指輪づくり。今回は、東京・神宮前にあるアトリエの制作現場をご紹介します。

分業化と可視化で、若者も障がい者も「職人」に

木目金の制作工程は、材料の金属板を研磨し、表面の油分・汚れなどを除去することから始まる。板を重ねて圧力をかけ、熱を加えて接合、表面を切削し形状を整え、再び熱を加えながらねじり加工

次に角棒状に圧延^{あつえん}、タガネで模様を形成する工程などを経て、木目金が完成。その木目金を使って、指輪づくりに入る。八木さんが柰目金屋の制作システムについて教えてくれた。

「ジュエリーの制作は『職人の世界』といわれるところがあり、最初から最後まで1人で手がけて、修業に10年かかるといわれているのですが、当社の制作部門は『分業化』と『見える化（可視化）』をすることにより、若い社員でも制作可能な体制を整えています。全工程を複数のラインに分けて、スキルに応じた工程の分業体制をとることで、それぞれが作業に集中し、短期間でスキルを習熟できるようにしています。その結果、若者の雇用が可能になり、ひいては伝統技術やものづくりの継承にもつながっていると思います」

社員の平均年齢は27歳。専門学校や大学で彫金を学んだ学生を新卒で採用している。分業化と可視化の徹底で、若者の雇用創出とともに障がい者の雇用も可能になった。

「ベテランスタッフの手元の動画をモニター画面で確認し、工程表を見ながら作業を行うことで、新卒でも即戦力として業務にあたることであります。売上げに準じて雇用も増やしており、若年層と障がい者の方の雇用につなげることができています」

障がい者の雇用は、社長の思いから始

職場 ルポ



木目金を制作するKさん。
均等に熱をあて、結合、ねじりをくり返す



地金制作担当の
Iさん

した。障がいのある方だから、そこそこのいいというスタンスで雇用はしていません。会社に貢献し、社会に貢献できるように、活躍できる場で生き活きと働ける環境をつくっていきたくと考えています」
勤務時間は、多くの人が5時間15分、長い人は6時間だ。

「6時間の方も最初は4時間からスタートしています。いまはまだ集中力、体力などの面で8時間勤務はむずかしいですね。勤務時間は、就労支援機関と密に相談しながら決めていますが、3カ月に1回、本人とわれわれも交えた三者面談をして状況を確認しています。本人も就労支援機関に向いて、面談をしているようです」

7人の障がい者のうち、先に入社した3人は、一般社員と同じ日報を、後から入社した4人は、体調面などを詳しくチェックした日報を書き、矢ヶ部さんがコメントを返す。
「日報のやり取りで、できるだけ体調面や精神面の变化に気づけるようにしています」

「自分に合う」職場で、 一人前の職人を目指す

作業の手を休めてもらい、制作工程順

に4人に話を聞いた。最初の研磨作業を担当するIさん（23歳）は入社4年目。実習を経験し、細かい作業は合っているうだと思いい、入社を決めた。

「自分に合っている仕事で、充実しています。油分がとれていないとか、汚れているだけで接着がうまくいかなかったり、きれいな木目金ができるように、磨き残しがないように気をつけています。これからは、経験を積み重ねて、ミスなく、早く確実に作業ができるようにしていきたいです。ほかの工程はまだよくわからないのですが、挑戦できるなら頑張ってみたい。働き続けていきたいです」

Kさん（34歳）は実習を経て、2014年1月に入社した。地金の研磨作業を行った後、接合した金属の加工作業に移った。

「最初はできるかどうか不安だったのですが、この会社なら合いそうだと思います。気をつけているのは、金属の板に均等に火をあてることで、コツがつかめてきました。これからは、作業内容のクオリティを安定させていきたいです。目標は、現状維持。働き続けていきたいと思っています」

半年前に入社したFさん（39歳）は、レーザー刻字の担当で、25mm幅の指輪の内側やペンダントの裏に文字を入れる。作業はものすごく細かい。

「最初はうまくいきませんでした。刻んだ字が曲がらないようにまっすぐに、決まった位置に正確に入れることがポイントです」

国立精神・神経医療研究センターで、空目金屋を紹介された。週5日、1日6時間勤務する。

「IT企業で働いていましたので、パソコンを使えて、制作過程の見える製造業が希望でした。合っている仕事だと思いますが、作業が細かいのがたいへんです。シフトで夜勤をしていた以前の仕事に比べると負担が少ないので、働き続けられると思います。土日は、翌週に疲れを残さないために家で休んでいます」
Mさん（32歳）は入社して8カ月。担当業務は、完成した指輪を撮影し、そのデータと商品の指輪を直営店に送ることだ。

「発送以外にも撮影などの仕事をしています。高価なリングを扱うので、落としたり、傷つけたりしないように慎重に作業をしています」

これまで数カ所で働いてきた。「ここは、働きやすいです。人間関係もいいですし、仕事もだいたい慣れてきて、自分に合っていると実感できるようなってきたので、長く働きたいと思っています。いつかは、このリングをつけたいですね」
出来上がった商品はすべて社長が検品のうえ発送している。



レーザー刻字作業をするFさん。刻印文字の確認をする作業は細かい

送信業務をするMさん。完成した指輪を撮影し、データ処理をする(左、左下)



ステップアップと雇用の拡大を

2016年、「より細かくケアができる体制に」と管理部に「障がい者雇用促進室」を設置し、矢ヶ部さんが専任となった。

「現場で教えてきた土台はありますが、いまも手探り状態です。教えたのに忘れてしまうことがあったり、

一歩進んで二歩下がるとか、なかなか前に進まないこともあります。一つひとつ丁寧に根気よく進めていくことが大事ではないかと思っています」

穏やかに話す矢ヶ部さんに、配慮していることを聞いた。

「あいまいに話したり、『こんな感じで』と話す伝わらないので、明確に具体的に伝えることが大事だと気づかされました。それは障がい者にかぎらず、健常者



にも必要なのかと思っています」
八木さんは、職場の雰囲気は自然に見えると話す。

「分け隔てなく教えたり、報告をもらったり、特に障がい者という意識はしていないように見受けられますね。コミュニケーションを高めるために、部署ごとに月1回、「飲みニケーション」をするのが会社のルールです。参加費の一部を支給して、夜にできない場合はランチを一緒にするようになっていますが、障がい者の方たちも参加しています」

目金屋では、伝統文化の継承のほか、使用するすべての電気をグリーン電力でまかなったり、緑の募金に参加したり、教育支援活動を行うなど、さまざまな社会的な活動にも取り組んでいる。和久田さんに社風を尋ねた。

「桜というデザインの縁で、さくら並木プロジェクト(※)にも参加していますが、社会とのかかわりを大切にしている会社だと思っています。結婚指輪の制作は、人の幸せをつくる仕事ですので、結婚するおふたりだけではなく、もっと広い意味での幸せを考えていこうという思いがありますね」

購入者が、ひとつにつながった模様の結婚指輪を、2つに分かち合うデザインと手法などが評価され、2015年にグッドデザイン賞を受賞。同年に経済産業省の「おもてなし経営企業選」に選ばれ、

2017年には「伝統技法をデータ化し、安定したクオリティで提供できる体制を整備。若者の雇用確保と全従業員の5% (申請時) にあたる障がい者雇用率を実現。顧客の声を取り入れながら、経営改善に取り組んでいること」が評価され、同省の「おもてなし規格認証★(紺認証)」も受けた。

八木さんは、さらに障がいのある人たちの雇用を進めたいという。

「どんなスキルアップをして、地金の人には模様をつくる工程にチャレンジして、リングを丸めてほしいと思います。今後は、制作だけではなくて、本社の事務関係の業務の切り出しをして受入れ体制をつくりたいです。いまは精神障がいや発達障がいの方だけで、バリアフリーの面から身体障がいの方の受入れはむずかしいところもありますが、雇用人数と、身体障がい、知的障がいなど、障がい種別を広げていけるような形をとっていきたいと思います」

「世界で1組」の指輪づくり。アトリエでは、障がいのある人たちが、各自の得意分野を活かす形で、ともに作業を進めていた。質の高い商品を提供し、企業の社会的な責任を大切に考える企業は、障がい者雇用も当たり前のこととして取り組んでいた。